

第5章 札幌トモエ幼稚園における 基礎的人権教育の実践

第1節 生命・倫理体系の確立と自己認識を高める人間科学的実践

トモエの実践研究は「人間の科学」が最も根本的な基盤となる。「人間とは何か」「自分とは何者か」を探究することから、この実践研究は成り立つ。

人間という不思議で神秘的な存在について考察を重ね、自分自身がどのような人生を歩もうとするのかを考え続けているのが、トモエのスタッフと親たちである。人間として豊かな感性の基礎を創るのが、乳幼児期である。その時期の子どもに大きな影響を与える大人たち自らが、自己存在の認識を高めつつ生きることを基本としている。

自己存在について思考すると、生命の不思議と神秘を考えざるを得ない。自分の生命の誕生を考察することで、生きていくことは死を考えることであると気づく。生と死の謎を思考し続けることは、感性の豊かな乳幼児と関わる大人としては当然の責務である。

トモエは、幼児教育の基盤は親自身であることを確認しつつ、実践している。親自身が「家庭とは何か」「夫婦とは何か」「子どもとは何か」を常に考察し確認し合えるように指導している。家庭を創るのは夫婦の「信頼」によるものであり、夫婦が互いに向き合って理解を深め合って生きることを援助している。

一組の男女が、互いに信頼し合って結婚し、夫婦となる。その信頼関係から、ひとりの生命が誕生する。生命は信頼から生まれるゆえに、親から信頼されなければ、子どもは情緒が安定して育つことができない。信頼の尊さを大人が確認し合える精神的環境が、個の成長には必要不可欠なのである。

人間として生まれた生命が、どのようにして人として育つのかを、多くの乳幼児と日々触れ関わりながら考察することのできる場がトモエである。

基礎的人権教育の実践研究は、自己存在の認識と確認から始まり、確信がもてるように導く。自己の生命の誕生の神秘と不思議を常に考察学習し、自己認識を高めることで、自己存在の尊厳を確信することができる。その確信が、他者の尊厳を確認することに結びつき、互いの人間関係の中で人間尊重を具現化することになる。

自分が心地良い時の目の輝きを認識することが、自己存在を確認する手段となる。自分の目を見て、自分自身の心を見る訓練をし、自分の心を映し出す「心の鏡」を持てるように、具体的な個人指導をしている。

事例(1) スタッフ研修会は「人間とは何か」を学び合う

最も基本となるのは、トモエのスタッフ自らが人間を探究し自己認識を高めることである。そのため研修会を、年に二度、三日間づつ時間を持つ。そこでは様々な専門分野を通して「人間」について学び合う。

スタッフの研修で学び合うべき事項は、実に数多く幅広い。精神医学・動物行動学・脳生理学・青少年犯罪学・家族関係学など、人間に関するすべての分野が研究の対象となる。

人間存在は不思議で神秘的であり、一生涯をかけて探究していく必要がある。トモエのスタッフ研修では、結論は与えられない。それぞれが自ら感じ、考え続ける。自分自身について、子どもたちや

親たちとの関係について、などを具体的な実践の中で探究していくには、たいへん長い時間が必要である。

次にあげる文章は、研修で学んだことについての、あるスタッフによるレポートである。隔週刊の「トモエだより」に掲載し、研修での学びを父母と分かち合っている。

“ 22歳までの私は、私であって私ではなかった。母を喜ばせる奴隷だった。その姿が「良い子」だった。...私は自分がしたいと思ったことをするよりも前に、それが母の決めたルールに合っているかどうかを判断してから行動していた。私の行動の99%は母に支配されていた。...私は、母の笑顔が見たかったのだ。ただそれだけだった。親から自分の存在を悦んでほしい、強烈にそう思っていた。その弱みのせいで、私はすっかり母の奴隷になるように洗脳されてしまったのだ。”

これは、すでに結婚し2人の子を持つ25歳になる女性が、カウンセリングによって自己分析ができて母親からの呪縛から解放されつつあるときに書いた手記の一部です。今年の冬休みのスタッフの勉強会の1日は、香川大学教授の岩月謙司氏の著書『家族のなかの孤独 - 対人関係のメカニズム -』を題材に進められました。この手記は本の第1章にあたり、7章からなる本書の導入部です。しかし、これは重たい導入部です。読み終え、涙があふれ止まりませんでした。

旧来、家族や親子関係について考えるとき、それは温かで子どもの成長にとってのプラス面が強調される側面がありましたが、そこにはそれこそが人間性を育む核であるという認識から、マイナスの側面を見ようとするのをタブー視する風潮があったようです。しかし、近年、精神科医の斎藤学氏（『アダルトチルドレンと家族』学陽書房など）らにより、その闇の部分に光が当てられるようになりました。家族、特に親の子どもへのかかわりが子どもの心の病の原因となっていることがあるということを、たくさんの症例研究から明らかにしています。親子関係には、悲劇が生じる可能性があるということです。

手記の女性の母親は元キャリアウーマンで頭が良く、いろいろな才能を持っていたけれど、病弱な夫と結婚して、その才能のすべてを家庭につぎ込んだと書かれています。自己犠牲的な態度で夫や子どもの世話をし、社会から認められなくやささをこぼしていました。「でも、子どもが優秀だから鼻が高いわ。私は幸せな母親だわ」と、それが子どもを奴隷化させることだと気づかずに言っていたようです。また、この母親は一見子どもの幸せを願っているようで、そうではないと記されています。子どもが一生懸命自分の力でピアノを練習し達成感に浸ろうとしているとき、また真の友人関係を築こうとしているときに、気に入らないと邪魔してしまうのです。母の嫉妬と表現されています。本人にその意識はないので、たちが悪いといえます。そうしてこの女性はいよいよ母親の奴隷と化していくわけです。また、ピアノの練習に意欲を失ったとき、発表会のためにもと母親が父親に練習をするように頼んだけれども、「イヤ!」「練習しろ」「イヤだ!」の押し問答の末、殴られてしまいます。女の子が最初に恋をするはずの父をも失ったのだ、と記されています。

その後この女性は、大学生の頃に真面目に大学に通うフリをしてボーイフレンドのアパートに通い、愛のないセックスにおぼれ、また寂しさからテレクラもやったそうです。そして自分についたウソで八方ふさがりになり、彼のアパートの風呂場で手首を切ったり鎮静剤を飲んだりと自殺未遂を起こします。その後、彼女は母の喜びそうな医師と結婚し子どもをもうけますが、また自殺を企てます。その後、彼女は岩月氏のカウンセリングを受け、徐々に回復していくのですが、その過程でも、人間不信に陥っている彼女は岩月氏を試そうと致死量の鎮痛薬を飲んで研究室を訪れ、もうろうとした中で、動ぜず「生きたかったら吐け」と言う岩月氏に救われていくのです。

悲劇です。親との関係で子どもがこんなにも人間性をずたずたにされ、死をもってしか自分を取り戻すことができなくなるなんて。

この手記には、幼児期の思い出は4歳のときに幼稚園で覚えた汚い言葉を使った時のことだけしか書かれていません。彼女の母は怒鳴ったりぶったりはせず、恐ろしい顔でにらみつけるだけですが、それはとても怖く、見捨てられるのではないかという恐怖心を喚起させるものだったということです。その後の彼女の人生は、ずっとその不機嫌な顔に支配されるようになったといえます。

幼児期の記憶というのは、特に強く印象に残ったもの以外はあいまいで、あまり覚えていないものです。しかし、幼児期におけるこの女性と母親の関係は、この出来事に象徴されるものだと想像できます。それは先にあげた手記の一部にも書かれている母子関係が、すでにこの時期に表れているからです。この女性は4歳から、いやたぶんもっと前から母親の顔色をうかがいながら生活していたのでしょう。

幼児期までの子どもはとても感受性が強く、特に自分と一体である母親の影響を強く受けます。母親が自分をどのように見ているかを敏感に察知し、それを自己のなかに組み込んでいくといわれます。イギリスのウィニコットという小児科医で小児精神科医は、「お母さんを見つめる時、赤ん坊はふたつのものを見ている。お母さんの瞳と自分を見つめているお母さんとを」と述べています。赤ん坊は、お母さんが自分をどのように感じているか、見ているかをしっかりと感じているということです。この手記の女性は、赤ん坊のときから母親の瞳に自分が肯定的に写っているか否かを読み取っていたでしょう。4歳の時の経験は、それがその後の彼女の人生に決定的に作用するに十分な布石が打たれていたうえでのことと解釈できると思います。

この手記には詳しく書かれていませんが、彼女が乳幼児期から母親の影響を強く受けていたという当然の事実を思うとき、何か背筋が寒くなる思いがします。

しかし、ことほどさように乳幼児期の母子関係の重要性を強調すればするほど、母親には責任が重くのしかかってしまいます。確かに責任は大きいとしても、母親とて完全ではありません。欠点もある生身の人間です。特に子育てというのは、子どもと真正面から向き合わざるをえないために、内面が表れやすいものです。いい面も出ますが、悪い面も出ます。いい環境に置かれなければ、悪い面が循環して出てしまうでしょう。

その点、昔の子育て環境は、母親の周りには年寄りや同じく子育て中の母親、先輩の母親などがいて、不十分さを補ってくれたり助けてくれたりということがあり、悪循環に陥らないですんだと思います。昔の母親だって、孤立した子育て環境であれば、今の母親のように苦勞を背負わざるを得なかったと思います。

そうしたことを考えると、手記の女性の母親には、彼女の不十分さを補い、助けてくれる人がいなかったのだと想像できます。また、彼女の娘への対応は彼女自身が育ちの過程で身に付けたもので、それは彼女自身が癒されることが必要な質のものだと思います。だれも彼女を癒してあげられなかったのでしょう。全く彼女だけの問題ではないのです。

もう一つ、この母親だけでなく、この手記の女性にも、彼女の窮状を理解して手をさしのべてくれる人がいなかったのでしょう。オーストリアの精神分析医のアリス・ミラーは、親からの冷たく心ない仕打ちを受けた子どもでも、たった一人でもいいからその子に寄り添い温かく接してくれる人がいれば、その子は救われるといえます。そうした人を「事情をわきまえた証人」と言います。

ついついこんなことを考えてしまいます。もし、この親子がトモエで過ごすことができたらと。トモエは親のための環境です。特に母親が自分を見つめ自己を修正し成長していくための環境です。

そのために必要な癒しや支えが得られる環境です。(その過程では、相手を傷つけたり傷つけられたり、そのことに気づくこともあります、気づかないこともあります。)あの母親には誰かが寄り添い癒してあげることができたかもしれません。また、子どものほうにも「事情をわきまえた証人」が現れて、支えてあげることができたでしょう。そうすれば悲劇は防げたと思います。そうした意味では、トモエは悲劇を予防する社会的機能を持っているといえます。

そしてトモエはなんといっても、乳幼児を通して人間とは何かを学ぶところです。現代社会では、乳幼児は人間として不完全とされ、人格もまともに尊重されない存在です。しかし、人間の核の部分、清らかさや美しさ、不思議さや神秘さを持った存在です。前日の勉強会では幼児教育の父といわれるフレーベルについて学びましたが、彼は幼児の活動は純粋な精神、神的なものが表れると考えていたといえます。大人にとっては、彼らを理解するのは簡単ではありません。目にはフィルターが幾重にもかかり、脳にはバイアスがかかって、彼らのありのままをとらえることが難しいのです。それを可能にするためには、たくさん子どもと共に過ごし、いろんな場面で見触れることが必要です。そのことはトモエでたくさんの方が経験していることだと思います。

またフレーベルは母親の教育についても述べていますが、神的なものが宿る子どもを伸ばすのは母親の仕事だといっています。母親が人間の最初の教師であり、母としての自覚を促すためには母親の教育が必要だと考えていたのです。(晩年にその考えに至り、自らは実践できませんでした。)人間らしい教育の場である家庭の中心に母親を据えていたのです。トモエの考え方と同じだと思いませんか。いや、幼児教育の父が実践できなかったことをトモエでは実践しているのです。

トモエは子どもから具体的に人間とは何かを学び、互いに支え合って成長を目指す母親をうんでいます。彼女は家庭の中心にいて我が子を守り育て、父親を刺激しています。また、母親同士のつながりから家族同士のつながりも生まれます。実際に、そのつながりがずっと続いている卒園家族もあります。

アッチでワイワイ、こっちでガヤガヤ、みんなであばれて汗を流したり、お祭りがあつたり、協同で何かを作ったり、歌ったり踊ったり…。地域社会の崩壊と言われて久しいですが、トモエはまさに人間が育つための共同体的な地域社会なのだと思います。フレーベルは天国で喜んでいるはずですよ。

最後に、トモエが一人一人にとってどんなところか、園長がそのポイントを5つあげていましたので伝えましょう。(1)自由の本質から、自分の本音を出し始め、自分の本当の姿を見ることができるようになる。(2)自分の素晴らしいところと傷も見えてくる。傷が深いと、傷のほうばかりを見るようになる。(3)心が裸にされる。裸にならざるを得ない状態になる。(4)本当の自分を発見し、今度は本当の自分と闘うようになる。(5)社会共同体として、一緒に闘う雰囲気がつくられる。

この勉強会を通して、トモエの存在意義を確認することができました。皆さんに、少しでもおすそ分けです。

事例(2) 人間探究の最先端を各専門分野の講師から学ぶ

スタッフの研修会の他に、父母たちも交えて学び合う機会も数多く創っている。日常的には「スタッフとのフリートーク」と「園長の話会」が、それぞれ月に一度づつ開催される。

親たちはスタッフを囲み、子どものこと、自分自身のことなど、身近な話題を通して自由に話し合う。スタッフや他の親たちと体験を分かち合い、悩みや喜びを共有しながら、親として生きることを思考している。また、園長との話によって、多くの事例や資料を基にして、親であることの意味や子

ども理解について、親たちは学び合っている。

さらに必要に応じて、個人的な相談にのり、直接的具体的な指導を行う。

これらの研修には、各専門分野から特別講師を招いて学ぶこともある。以下に記す各氏は、これまでに招いた講師陣の例である。(肩書きは当時のもの)

- * 中川志郎氏 (上野動物園園長)
- * 渡辺久子氏 (乳幼児精神科医・慶応義塾大学教授)
- * 土橋信男氏 (北星学園大学学長)
- * 尾谷正孝氏 (札幌国際大学教授)
- * 中野茂氏 (北海道医療大学教授)
- * 渡部保夫氏 (元札幌高裁裁判官・北海道大学教授)
- * 横川和夫氏 (共同通信社論説編集委員)
- * 戸田一夫氏 (北海道電力相談役)

この他、脳神経科医師や臨床心理士など、多くの人々の協力を得て「人間」を学び続けている。

事例(3) 母親が「今の自分に正直に」生きようとする時

研修および子どもたちとの日々の生活の中で、親たちは自己を省察し、生命・倫理体系を確立しようとしている。次の母親のレポートからも、それを垣間見ることができよう。(以下、文中の親子の名前はすべて仮名)

大輔と土・日・祝日を除き、ほとんど毎日のように親子でトモエに通っている。月曜日から始まり、金曜日にはさすがに体も心も少々疲れる。土・日はたまった洗濯物や部屋の掃除等…。大輔も一人で行くのにもだいぶ慣れた頃だし、月曜日は一人で行ってもらおうかなとフツと思う。

…しかし月曜日があると、自然と自分のお昼を用意してしまっていたりして、気がつく二人で車でGO!だ。

時々マジメに不思議に思う。「なんでこんなにキチンと通ってんだろ」って。トモエに来ると、毎日同じ空間なのに、同じ顔ぶれなのに…。でも、いろんな物の見方を取り入れてみると、実はものすごく興味深い。

私の普段していることといたら…、気の合うお母さんとおしゃべりしたり、園長先生とお話ししているんなことに気づかせてもらったり、スタッフの皆さんとおしゃべりしたり、ふざけたり、あっ、もちろんいろいろ教えてもらったり、トモエの子どもたちと遊んだり、大輔とじっくり遊んだり(これは最近減ってきた)そして一人でポーツとコーヒーを飲んだり(園長先生、いつもおいしいコーヒーありがとう)行事がある時は、なんとなくお手伝いのつもりが、ものすごく熱中してたり…と、あげたらキリがないくらい、いろんなことをしている自分がいる。

通って二年になるけど、ここで私的に得たものは計り知れない。意識しようがしまいが、全身でいろんなものを感じている。特に何かに夢中で取り組んだり、大輔と真剣に向き合ったり、たまに起こる意見の交換や子ども同士のやりとりの中に参加させてもらったりした時、私の中で何か変化が起こっていることに気が付く。

それって何だろう？

なんでこうもいちいち心にしみわたるのかなー？

トモエに通っていると、何だか大輔と一緒に遊んでいるだけで、今までいっぱい身につけていたよけいな物を少しずつ降ろしていける気がする。降ろしてみてもはじめて「いらなかったんだ」ということに気が付く。そのくり返し。

ちなみに「私のいらなかったもの」ベスト5は、「人の目を気にすること」「自分にウソをつくこと」「物に執着すること」「争うこと」「急ぐこと」と、イザ書いてみると、何だかお寺にでも修行しにいったのかと思っちゃうくらい、メンタルなことだったりする。別に、誰かにお説教してもらったわけでもないし…。ただ、そういうことがスッと自分に入ってくる。

私はここで楽しく日々を送るコツみたいなものを、自分なりに身につけているようです。

以前、乳幼児精神科医の渡辺久子先生がトモエにいらした時、園長のイキなはからいで、行き帰りの車中ご一緒させていただいた（大ファンなもので）。その時の会話の中で、久子先生がとっておきのことを教えてくれた。

「私はあなたが本当にうらやましいわー。こんなに素晴らしい空間に毎日来られるなんて。ここで起こっていることは、批判せず、意見せず、ただそのまんまを受け入れてごらんなさい」と。

何！？ ただそのまんまを受け入れる？ ど - ゆうこと??? うらやましい？ エー！！

そうそう、こうも言っていた。

「子どもの世界をジャマしちゃだめよ。黒子になって、ただ見守るだけでいいの」

「うーん、私にとって一番むずかしいことだあ」と頭をかかえてしまった記憶がある。じゃ、どうしても子どもの世界に入りたくなったらどうすればいい？ と考えたあげく、「あたしもその時は子どもになっちゃお」と勝手に思って、たまに仲間に入れてもらったりする。

先生の言う通り（できるだけ）トモエで起こっていることをただ見て、「そうなんだー」的に自分の中においてみると、自然に「私はどうなんだ？」と思っている自分がいる。そこから、本当に果てしない「私」との会話に、今現在熱中している最中です。

この作業は実はすごーくしんどい時もあり、そんな時、大輔のするどい一言にノックダウンしちゃう救われたり、もう上がったたり下がったり…。

そんな中で、今一番思うこと、それは「今の自分にできるだけ正直になってみる」こと。もしかして人に迷惑かけるかもしれないけど、自分がキズつくかもしれないけど、自分にウソをついていた時ほど大事な人をキズつけていたことに気が付いた。「これは何とかした方がいいよ、やっぱり」と私の中の私がしみじみ言っている。あーあ…。でも、そんな私をまっすぐに見つめている大輔がとなりにいた。

私は、彼が生まれてきてくれたことで、“人を愛する”ということを実は初めて意識してきたように思う。“愛される”ことはあっても、自分が誰かを“愛する”ということをおんなにも意識したことはあっただろうか。もちろんパパとは恋愛結婚だから、愛し愛され…の関係のはずなんだけど、ま、これはプライベートなのでここまでにしておいて。

だけど何だかもっと大きな意味でのこととして、今の私はそれに向き合っている。どんなに過去にキズついている人でも、自分のことを信じて受け入れて、待ってくれる人が…そんな人が一人でもいてくれるだけで、自分を取り戻せると私は強く信じている。そう信じていながら、私もそうやってもらってここまで来ていながら、どれだけ今大切な人にそれをしてあげられているだろう…。

今はその答えみたいなものは、自分の中にはまるでない。本を読んだり人の意見を聞いたりして、答えは頭の中では分かっている。でも一番大事なものは、自分が本当にできているかということ。あー、段々むずかしくなってきたから、もうここまでにしておこう。今はそれでいいやっ。

でも、こんなことまで感じられたり考えたりできる今って、スゴイ！！なんて貴重な時間なんだろう。「ありのままの自分」になりたーい！「正直」に生きたーい！...よしっ、この調子でいくと、卒園までには私はとんでもなくスーパーな人になっていそう。そんな予感。

今はいろんなことを感じっぱなしでいよう。だってその方がラクでいい。この先の人生ずっと生きやすくなるはず。きっと、だから私は毎日トモエに来ているんだなーと、すごい理由をつけてみました。でも、ここで起こることに逃げずにいると、すごいごほうびが待っていることはゼッタイに確かだ。逃すともったいないゾーと、もったいないおかげがそう言っている今日この頃でした。おしまい。

事例(4) ねえ、お母さん、人はどうして生きていかなければならないの？

親たちは、研修会での専門的な学びを基礎として、子どもたちを通して具体的に「人間」を学び、自己認識を高めている。乳幼児たちは日々の生活の中で、人間について考える素材を私たちにたくさん提供してくれるのである。

6歳男児と0歳女児の母親のレポートを紹介する。

「ねえお母さん...。人はどうして、こうやって毎日生きていかなければならないんだろうネ...。」
ちょっと前の日曜日、昼下がりのたいくつなバラエティー番組をボーッと見ていた陽平が、つぶやくように問いかけてきました。

「?!」- 内心かなりぎょっとしましたが、ここは母としてのあたたかいひと言を...と思い、しばし考えてから、「う~ん、お母さんの場合は、きっと陽平と亜希のお母さんをする為にかなあ。」と、ニッコリしてみました。「キマったナ...」と思いながら。

それを聞いた陽平は、上目づかいに私を見つめ、やがて口元をニンマリと広げて「ホ~ントにい~?」と、何やら疑わし気です。

心の底の、また底を見透かされた気がして、さして用もないキッチンの方にそそくさと消えようとする私。人類の永遠の問題をぼろりと口にしたあの彼は、もう鼻クソなどほじりながら、テレビに視線を戻していました。

息子が与えてくれる、このようなセンセーショナルなテーマは、たびたび私の睡眠時間を減らします。その日の夜遅くにも「私はいったい何の為に人生を歩むのか...」と、ひとしきり考えることになりました。

陽平に答えたこともウソではありません。でも、勿論そればかりではありません。

「人を愛する為」

「出会い、別れる為」

「何か大切なものを探す為」

「生まれてきたから、ただ、生きる」

「学び続ける為」

言葉の上では色々思いつきますが、どうもしっくりこない感じもします。今のところは、私の場合「今日を楽しむ為」というところでしょうか。

それはさて置き、陽平が私にそのような質問をしてきたことの背景に目を向けてみることにしました。彼の言葉が、全くの何かの受け売りでないならば(私は受け売りではないと思うのですが)「生きていかなければならない」と表現した彼の毎日が、けっして楽しくおもしろおかしいことばかりで

はないことがうかがえます。

それは当然といえば当然なのですが、そこをもう少し考えてみると、色々なことが見えてきました。

子どもは、肉体的にも精神的にも、大人の何十倍ものすばらしい自然治癒力を持っています。ケガをしてもすぐ治ります。陽平も、自転車でひっくり返ってひどいケガをしたことがありますが、深かった傷あとはほどなく消えてしまいました。けれども、ケガをしたその時の痛み方は、見ている方までひりひりとしてくる程でした。早く治るから、たいしたことない傷だったということにはなりません。それは、精神的な傷にも同じことが言えると思います。

子どもはよくトラブルを起こしケンカをします。ワンワン泣いて、母親の元に戻る姿は、トモエでも日に何度も見かけます。けれども、そのほとんどは数分、よほどひどいものでも次の日になればケロリとしています。このケロリの早さがくせもので、私などはすぐ「ああ、たいしたことなかったのネ」と思ってしまいがちです。でもきっと、肉体の傷と同じで、傷ついたその時は大人のそれと同じ様に、いや、きっとそれ以上に痛んでいるのでしょう。

午前中に仲良く遊んでいた子が、午後は虫の居所が悪く「もう遊ばない」なんて言われたりする。そんなことを毎日の様に経験しながらも、翌日にはタフにトモエに乗り込んでゆきます。親の間でもそれは同じで、あんなにきつく叱ったのに、もうケロリという姿は日常茶飯事。しかしこちらも血の通った人間なので、「すぐケロリとできる陽平ってタフですばらしい」なんて、その時には思えません。いったいどちらが子供なのか、判らなくなってしまう。

と、こんな具合にとりともなく考えているうちに眠ってしまい、結論はおあずけ、というのがいつものパターンです。

翌朝目覚めると、子供たちは布団の中でもう起きていました。朝から元気よく体を動かしている妹の手に触れながら、兄は母に聞きました。

「お母さん、亜希は最初、ずーっと手をゲンコツの形に握っていたよね。あれはどうして？」

「う～ん...何を握りしめていたんだろう。でも、陽平もそうだったよ。」

「うん、ボクはね、お母さんのおなかにいた時からゲンコツの中にずっと持ってるものがあったんだよ。」

「え？ ホント？ 陽平は何持って生まれてきたの？」

「それはね... “キボウ” さ。」

「??!!」

希望の意味を知ってか知らずか、涼しい顔で言っただけです。びっくりするやらおもしろいやらで、「亜希にはスゴイお兄ちゃんがいるねエー」と、妹の方の顔をのぞき込むと、彼女はまじめな表情で「クウ～（空）...ムウ～（無）」と、思索にふけっているではありませんか！ やはり哲学者の血筋なのでしょうか？！（すぐ後に、ウンチをしていたと判明しましたが...）

そんなこんなで、卒園のムードが漂い始めたこの季節、私の毎日は時に甘くせつなく、時に摩訶不思議に、とってドラマチックに過ぎてゆくのでした。

事例（５） 新たな自分を創造する葛藤と喜び

人間についての深い学びを日々の実践の中でどのように具体化していくのかという点は、それぞれの個にとっての大きな課題である。トモエ15年目のスタッフのレポートから、この点についての一例を報告する。

昨年末に行われた「2000 年お別れ会」はいかがでしたか。とても楽しかったという方もいるでしょうし、いまひとつ楽しめなかったという方もいるかもしれません。それぞれの様々な感想と反省を今後の活動に活かしていきたいと私は考えています。

さて、これまで年末のこの時期には、毎年「家族クリスマス会」を開催してきました。クリスマス会は恒例の行事ですし、今回初参加という家族以外は当然前回の様子が記憶に残っていて、そのように心づもりしているでしょうから、例年通りのクリスマス会でもよかったのです。実際にその方が、混乱もなくそれなりに楽しい一日になったことでしょう。ところが、私たちはそうはしませんでした。あえて新企画と銘打って準備を進めました。

何年も前から、クリスマス会ではなく別の名前にしようという意見はスタッフの間にはありました。クリスマスはもともとはキリスト教の祝祭ですが、現代日本の社会では、クリスマスという名目を借りただけの単なる忘年会になっている、といっても間違いではなさそうです。もちろん、忘年会や大騒ぎは大いにやるべきです。少なくとも私はそう思っています。しかし、クリスチャンでもないのにクリスマスというのは、どこか変だと思いませんか。まあ、今ではお寺でもクリスマス会をやっているところがあるそうですから、そんなことに目くじら立ててもしょうがない、という意見もあるでしょう。でも、トモエには様々な人が参加しています。仏教の人や神道の人やイスラム教の人や無宗教の人やいるでしょう。クリスマスだけやって他の宗教のお祭りをしないというのもおかしな話です。年末のこの行事が「クリスマス」でなければならない必然性はほとんどないわけです。

時はちょうど 20 世紀と 21 世紀の境目。これを会のタイトルにしようとした意図は、そういったところにもありました。もっともかなりひねくれた考え方をする私にとっては、世紀の変わり目といっても特別な感慨はありませんし、2001 年というのも世界で最も普及しているとはいえキリスト教に関連した暦の上でであって、他の様々な暦では今年が特別な年であるわけでもありません。それに、年が明けたからといって必ずしも「めでたい」とは私には思えませんし。年末年始に飛び込んできたニュースの数々が、私の心を暗澹としたものになっています。が、それらはさておき、猫も杓子も 21 世紀と叫んでいる今の状況を利用するのも悪くはなからうというのが私の気分でした。もちろんこれは私個人の思いで、他のトモエスタッフは皆、もっと素直に新年を祝っているのではないかと思います。

御存知の通り、この十年余のあまたの努力にもかかわらず、トモエの存在は飛躍できずにいるもどかしさの中にあります。その現状にひとつの区切りをつけたいという意志もあり、今回の会をその節目にしたいという思いが、私の中には強く作用していました。会の名前を変えるだけでなく、内容もまたそれにふさわしい新しいものを、と私は漠然と思い描いていました。自分たちの歩みの未来を夢見て、希望をもって新しい出発をする勇気が湧いてくるような、そんな印象を企画する私たちも参加する人たちも感じることでできる会にできたら、とも考えていました。

さて、では具体的にはどんなことをするのかとなると、これがなかなか思うようには話が進まないのが私たちの常なのです。たとえば、時間帯を変えてみたらどうかとか、食事は持ち寄るのではなくその場で皆で作るといった形はどうかとか、ろうそくは使わずに音と光でアッと驚くすてきな演出はできないものかとか、秋のトモエクリエーションと同じ位の大々的なゲーム大会にしてはどうかとか、その他いろいろなアイデアが浮かんで消えました。上記のような思いきって変えようという意見があれば、やっぱりいつものクリスマス会でいいのではないかという意見もあり、スタッフ一同、ギリギリまで考え合い悩み合いました。

意気込みの強さはもちろん必要ですが、そのイメージを具体的な方策なり演出なりに形成する力が、私たちにはもう少し必要でした。私の気持ちの中では、「結果には充分満足できないけれども、様々な制限の中で最善を尽くそうとした」という思いと、「自分の思考と感性をさらに磨いて、来年こそはきっと新たな形を」という思いとが交錯しています。

ところで、何故このような舞台裏をトモエだよりに長々と書いているのかとといいますと、私には「トモエは生きてうごいている」という感覚があって、それをどうにか表現できないものかと考えたからです。トモエは、「こうすることになっている」とか「こうしなければならない」といった固定されたものではなく、参加している皆で共に創造し続けているものなのではないか、というのが十余年の体験から私が得た実感なのです。

何事においても、すべきことがあらかじめ決まっていて、その通りに動いている方が楽です。毎日の生活の中のひとつひとつも、年に何回かの大きなイベントも。何かをゼロから創造することも、すでにある何かに大きな変化を与えることも、できれば避けたいと思ってしまうのが、私たちです。いや、少なくとも私は、そうなのです。今までと同じことが繰り返されるならば、こちらも対応の仕方を変える必要はありませんから。何かに変化があれば、あるいは何かを変化させようとするれば、私自身も変わらざるをえなくなる場合が多いですから。新しいものに挑もうとする時には、たいいていの場合に大きな勇気がいりますから。変化、というよりも前進するという意味では成長ですが、そのために動き出した時の周囲の反応は、必ずしも共感ばかりとは限りませんから。やっぱり、できるだけ楽しく生きていたい自分ですから。

ですが、だからこそ、あえて新しいものに向かって、大きな変化を試みたい、という私も私の中に存在しています。楽しく生きていたい自分と、そのレベルに留まっていたくないと思う自分との間で、私はいつも揺れ動いています。「自分はこんなにつまらない人間だ」「自分を変えたいけれども変われない」という思いと、「このままの自分ではいたくない」「もっとすてきな自分になれるはずだ」という思いとが、私の中で渦を巻いています。その両極間での葛藤が、私のトモエでの毎日の原動力になっていると思います。

毎年、冬・春・夏の休みの間に、スタッフ全員で研修会を行います。今回も約一週間、人間とは何なのかについて、生きることの意味について、トモエの在り方について、考え合いました。ゆっくりと自分を振り返る濃密な時間を通して、私は自分の考えをまとめる作業に没頭しました。どんな自分に変わっていきたいのか、そのためには具体的にどう行動すればよいのか、と。

トモエに参加する私たちがさらに自分らしく羽ばたいていくためには、私たちひとりひとはもちろんのこと、トモエの全体の流れも少しずつ変わっていく必要があるのではないかと、ということも確認し合いました。ろうそくの光の中で園長も語っていましたが、トモエは今年は今まで以上に大きく変化することになるでしょう。私は期待しています。トモエがどのように変化するのかにではなく、私自身がその変化にいかに関与的に関わっていきけるのかに。

事例（6） スタッフ自身が自らの夢を追い続けて生きる

スタッフ自身が夢を持ち、自らに期待をかけて生きていなければ、感性の豊かな子どもたちの前に立てるはずもない。あるスタッフは、自らの希望について語ってくれた。

「(小学)1年生なんて宇宙人みたいなもんだよ。」

大学時代、小学校の教育実習から帰ってきた先輩たちは、実習の感想を端的に表す言葉としてよくこの言葉を使っていた。1つ上の先輩も、またその上の先輩も、またまたその上の先輩も…。

定型文のようになったこの言葉。恐らく代々続いてきた言葉なのだろう。聞けばだいたいのニュアンスは伝わるし、色々想像もふくらむ。話題もふくらむ。実に便利な言葉だ。自分はといえば、実習は4年生担当だったし、休み時間はよく5・6年生と一緒にサッカーやらドッジボールやらをやっていたから、1年生と関わることは殆どなかった。だから後輩たちにこの言葉をしたり顔で使うこともなかったと思う。まあ私に実習の感想を尋ねてくるような物好きな後輩がいなかったからなのも事実なのだが。

それでもやはり同期の人たちは後輩にこの言葉を言っていた。「実習経験してきましたよ」的なちょっと自慢げな顔で。

実習に行ったのは今から8年前。この頃の学校の流行語は「学級崩壊」と「生きる力」(だと思ふ)。マスコミが騒いでいる学級崩壊がどんなもんか、ちょっとワクワクして実習を迎えた。実際に自分の目で見たものは、1年生の教室の中でじっと座れない子(1人)の姿。ベテランの男の先生がその子を叱ったりなだめたり無視したりと、手を焼きながら授業をしていた。その時は、「言うほどひどくないな」と思った記憶がある。マスコミが騒ぎすぎか、この学校はたまたまこうなのか、実習生が来てるから普段と違うのか、札幌だとまだ大丈夫なのか、など漠然と考えていた。だが、やはりちょっと違和感。1年生ってこんなに小さいのかという感じ。

だから同期の人たちが「1年生なんて宇宙人みたいなもんだよ、なあ？」なんて同意を求めてきたら、「うん…まあ…」なんて曖昧な返事をしていた。

トモエに来たのはそのあとくらい？で、世間知らずな自分はトモエで出会った人たちの言う「トモエって他の幼稚園と全然違うでしょ？(ちょっと誇らしげ)」という質問にも、「うん…まあ…」と得意の曖昧な返事をしながら、それでもやっぱり心地よさを感じながら過ごしてきた。いろいろな子どもたち、家族、スタッフ、自然と共に過ごす毎日。子どもたちと仲良く遊んだりケンカしたり、心配や迷惑をかけたりかけられたりした毎日。その中で子どもたちのことを「宇宙人」なんて思ったことは一度もない(よね？俺)。確かに理解に苦しむことがあったりお互い話が通じなかったりしたことはあったが、それは自分とその子の関係性であって、子どもたち全体に対する「宇宙人」のイメージにはならない。今更言うまでもなく当たり前なことだ。むしろそんなイメージを持っていたら、トモエにもう居れないだろうし。

そのことだけでも、トモエに来て大学時代よりも成長した自分がわかるし、これからも成長するだろう自分がわかる。

2年前に大学の同期の結婚式があった。大学時代から2人は付き合っていたので、結婚式の飲み会には大学の先輩から後輩までたくさん集まった。みんな酒も入り、それぞれが小さくまとまって話をしていると、近況の話になった。教師になった人が多い中、自分は幼稚園にいることを話したが、その時2人の人からほぼ同時に言われた。

「幼稚園児なんて宇宙人でしょ？(^^)」

「(@ @;)(!!!!!!)」

一瞬で色々な感情を処理しながら考えた。1年生もそうだから？本気で言ってるのか？言ってないとしても何割くらい本音だ？話題を広げようとしてるのか？じゃあ乗った方が良いのか？あれ？俺今なんか腹立ってるぞ？ここで面白話の1つでもしたほうがいいのか？真面目に語るか？酒の席でそれは野暮じゃないか？相手笑顔だぞ？なにを期待してる？話題変えた方が良いか？だとしたらな

に？うわ、沈黙長くなりそうじゃね？仕方ねえ、ここは！！！！

「うん...ま...」と得意の曖昧な返事。 - 話題終了 - O T L

この出来事が今でも忘れられない。教師を目指していたり現職だったりする人が言ってはならない言葉だ。

実習先の先生が言っていた言葉を思い出す。「教師という仕事は、現状維持でも勉強していなくても、定年までやっていける仕事だ。だからこそ、自らが学んでいかななくてはならない。」

あの人はきっと根本では大学時代から何も成長していない。と、私に思われても仕方ない。現状維持に勤しんでくれ、と思われても仕方ない。

もちろん普段は真面目にやってるだろうし頑張っているのだろうが、頭のほんの片隅でもこう思っているようでは、学校の未来はないだろうし子どもたちが可哀相だ。哀しすぎる。

そうかと思えばこんな教師もいた。話は戻って教育実習をした頃。

私は実習担当の先生とどうもうまくいかず、友達のお母さんに頼っていた。そのお母さんは小学校教諭だが闘病中で入退院を繰り返し、休職中だった。実習の帰りに毎日のように友達の家に寄って、10時過ぎまでそのお母さん先生から助言をもらい、授業の計画を立てていたが、その中で特に印象に残っていた言葉は、「1時間に国語で3行しか進まなかったっていいんだよ。子どもたちにたくさん話してもらって、一言一言を拾っていくのが大事だから。」と「一日5時間の授業のうちに1時間子どもと自分が集中して授業したら、あとの4時間は遊んでたっていいんだよ。」ということだった。これは自分の深いところにずっと落ちていった。教材に頼ったり、どうやったら静かに授業を円滑に進められるかにとらわれていた自分にはない感覚。子どもたちとの関係の深いところからきた言葉。本当に子どもと向き合ってるからこそわかる真実。

だから実習期間中のお母さん先生との時間が楽しくて勉強になって、本当に嬉しかったし、教師になってこの人と一緒に学校で過ごせたらどんなに自分のためになるだろうと思っていた。

しかしそれから4ヶ月後、お母さん先生はガンで亡くなりました。家に帰ってきているからすっかり良くなっていると思っていた自分。しかしそれは間違いだった。通夜には、これでもう一緒に学校で過ごすこともできなくなり、もう教わることもできなくなったという悲しい悲しい現実だけがそこにありました。

通夜が終わったあと、友達から「母さんはもう自分の命がながくないってわかっていて、俺は教師にならないから、だから君に、自分の先生として持っているものを伝えたくて、実習の時ずっと手伝ってたんだよ。あのときの母さん楽しそうだった。ありがとう。通夜の時『生前の趣味は 』なんて言われてたけど、ホントの母さんの趣味は『先生』だったんだよ...子どもたちと一緒にいることが全てだったんだよ...」と聞かされた。

最後まで子どものことを考えて、教師を天職として寄り添うように生きてきたお母さん先生。こんな先生がたくさんいれば、きっと学校の未来は明るいし、子どもたちは幸せだ。

では自分はこれから何ができるだろう？とそれから考えていた。

「宇宙人」なんて言葉は子どもを知らないから出てくるのであるから、もっと乳幼児期の子どもの理解を土台として持っている教師を増やさなければならない。だから私は小学校教諭になって北海道を転々としながら、そういう教師を増やしていく働きをしたい。幼稚園と小学校の連携、特に小学校の先生が定期的に幼稚園、保育園に行き就学前から信頼関係を創れるような環境を創りたいし、それを望む教師を増やしたい。

...と教員採用試験の面接で言ったら、案の定面接官から不快な顔をされた。そりゃそうだ。道は厳

しい。

懲りずに集団面接でも「学級経営について」みたいなテーマでも言いたいことを言ってきた。結果は案の定パート。まだまだ、「たくさん学級通信出します！」みたいな、親の顔色伺って子どもに気持ちが向いてないような意見の方が優遇されるらしい。面接官にしても、「どうやら子どもの様子が少し違うような気がします。あなたならどうしますか？」なんて質問をしてきて話にならない。正直うんざりしていた。

それでも集団面接が終わったあとに、「さっきの話、感動しました！私まだまだ勉強不足です。」なんて一緒に集団面接を受けていた女の人に話しかけられたりして、試験受けた意味があった気がした。ちょっと光が見えた気がした。

そこで感じたのは、同じ考えを持っている人がいることと、やはり自分から世界を広げていかないと何も進まないということ。そして自分にはまだまだ足りないものが多すぎること。あのとき曖昧な返事をしたのは、きっと自分に自信がなくて確固たる信念もなかったから。それに輪をかけて話をうまく伝える術を持っていなかったから。

だから今年はトモエを軸に色々な場所に勉強に行きたいと思う。

たくさん時間を費やして、やっとぼんやり見えてきた自分のこれから。それは、将来的には卒園生たちを安心して任せられるような教師を増やすような活動をしたいということ。自分の勉強不足、経験不足を棚にあげて、子どもを勝手に話の通じない、理解に苦しむ存在として宇宙人に形容してみせよう教師を減らし、一人の人間として向き合うことのできる教師を一人でも多く増やしていけたら。その人たちが協力して何かしらの変化をもたらしてくれたら。そう思っている。これからは自分がお母さん先生のようになって、自分の持っているものを伝えていきたいし、そうしなければならぬと思う。

そしていまいち話の通じない、乳幼児を理解していない教師にむかって、大きな溜め息を吐きながら言うんだ。

「アナタハ、ウチュウジンデスカ？」って。

1月30日、冬休みの研修会とお母さん先生の命日が過ぎて、思う。

事例（7） トモエで乳幼児期をすごした卒園生の倫理観

真摯に人間を探究しようとする大人たちの創る精神環境は、当然のことながら子どもたちに直接的に伝達される。この精神環境は、トモエの子どもたちの倫理観の形成に大きく影響しているであろう。

「新しい時代をつくる」21世紀作文コンクール・高校の部で最優秀賞を受賞した卒園生（18歳）の文章を転載する。

「わたしたちの二十一世紀」

二十世紀はまさに科学の世紀だった。

その科学の発展に伴い、医学も目覚ましい進歩をとげた。天然痘やハンセン病、結核などはまずかからなくなったといっても良いし、かかっても死に至る心配はないだろう。

けれども、そうした病気を怖がる必要はなくなったが、新しい別の病気が私たちの命を脅かすようになった。脳の病気であったり、心臓病、ガン、ここ数年では、エイズというのも耳にすることが多くなってきた。現代における難病とは、きっとこれらのことを言うのだろう。

しかしいくら難病といっても、治る見込みが決してないというわけではないと思う。手術における技術の向上、効果的な新薬の開発など、医学は今も進歩し続けている。だからいつかこれらの病気も、過去には難病と言われていたが今は治療法のあるものと同じように、そう怯えるようなものではなくなるに違いない。

それならば、これから二十一世紀を生きていく私達にとって恐ろしいことというのは一体何だろうか。

私はそれを「倫理観」の問題だと思う。倫理観を無視したり、意識しなくなること、それが一番怖いのではないか。

最初にそう感じたのは、「クローン羊が誕生した」というニュースが報道されたときだった。その時、「羊だからまだ良いけど、これがもし人間だったら絶対怖いよな」と漠然と思ったのだが、今ではその気持ちがより強くなってきている。

現在では、すでに羊のほか牛のクローンを造ることも成功しているし、遺伝子組み替え食品も店に出回るようになった。そんな段階まできているのだから、人間のクローンが誕生するのも時間の問題だろう。私がほんの数年前にただ想像していただけだったことが、本当に現実となるかもしれないのだ。

確かに、人間のクローンができれば、私たちに益をもたらすことも多いだろう。特に医学面においては、現代に存在する病気で治せないものなどなくなるかもしれない。

けれど人々は、ずっと昔から「運命」や「天寿」と言って、ある意味諦めの気持ちで死を受け入れてきた。それは医学が未熟だったせいもあるが、人々はその気持ちを境界線にしてきたのではないだろうか。

研究者なら、未知の領域を明らかにしたいと思うのは当然だろう。それでもどこかで境界を定めなければ、いつかきっと何らかの形で跳ね返ってくる。人間が「人間以上」どころか「人間以外」の存在になってしまうこともあり得る。

人間が人間であるための境界線。私はそれが「倫理観」であり、二十一世紀に最も大切なものの一つだと思う。

<参考文献>

- * 『センス・オブ・ワンダー』レイチェル・カーソン（新潮社）
- * 『人間・仮面と真実』ポール・トゥルニエ（ヨルダン社）
- * 『調和なき世界の人間』ポール・トゥルニエ（ヨルダン社）
- * 『人生を変えるもの』ポール・トゥルニエ（ヨルダン社）
- * 『強い人と弱い人』ポール・トゥルニエ（ヨルダン社）